

基督教では旧約聖書 39 巻、新約聖書 27 巻の合計 66 巻を正典と認めています。なお旧約聖書続編については、カトリック教会では第二正典と呼び、聖公会では「信仰の書」という位置づけで礼拝の中で用いることもあります。

「カノーン」の元々の意味は「測りざお」です。したがって「正典」とは、信仰と生活における「基準」という意味になります。

ユダヤ教では、まずモーセ五書(創世記・出エジプト記・レビ記・民数記・申命記)が、そして預言書と諸書が正典として認められていきます。ただしサドカイ派やサマリア人はモーセ五書しか認めなかったため、預言書に書かれている「復活」については受け入れることができなかったようです。

基督教は、そのユダヤ教の聖書を「旧約聖書」と呼んで受け入れていきます。そして新約聖書ですが、一口に「新約聖書」といっても著作年代は 100 年にわたり、様々な文書や手紙も残されていました。その中から、「基督教の聖典としてふさわしいもの」を収集していったのです。

例えば「ユダの福音書」や「トマス福音書」といった名前を聞いたことがある方もおられるかもしれません。わたしたちが手にする聖書にはこれらの福音書は載せられていませんが、それは基督教が正統だと認めた信仰とは、異なるからです。この辺りは詳しく書き出すとスペースがなくなりますので、これくらいにしておきます。

時代によっては、信仰ではなく行いが強調されるヤコブの手紙を「わらの書」だと批判する人が出たり、ヨハネの黙示録を正典に入れるのはいかがなものかという議論が起こったりもしてきました。しかし大事なことは、神さまから与えられた聖書のすべての書を、わたしたちが大切にしていこうことなのではないでしょうか。

次回は「聖別」です。お楽しみに。



「聖書協会共同訳聖書」

日本聖書協会 HP より

だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である。

(マタイによる福音書 7 章 12 節)

